

2020/4/18

(「語学の目的はコミュニケーション也」論説得の為の詭弁?)

最貧国出身で英語が母国語でない外国人相手に現場で仕事を指揮していると(つまり、従業員に実際に動いてもらわなくてはならないと)必ずしも正しい英語を使うことが「有効ではない」場合があることに気づきました。

例えば「行った」という意味の英単語

正解は、[go]の過去形で「went」となります。

例としては、昼近い開店間際になって従業員が

「買い物に行く (I go buying)」というので、

「なに!!開店間際になってまだ買い物に行っていないのか!!」

と驚くと

「No, No. Go, go (違う、違う、行く、行く)」

と又いうので、なんで、No、No の後に肯定形の Go, Go が来るのか違和感を抱いたので

「で、結局、行ったのか?行っていないのか?どっちなんや?」

と訊くと中身のつまった買い物袋を見せてきました。

それで、上記の「Go」が実は「went」の意味であり、文章としては

「I already went and came from buying (もう、買いに行ってきました)」

だと分かった次第。

しかし、これを何とか直させようと、時制の教育をし「行くではなく行ったが正しい」とか

「in the past mode, please use” went!!” Never use “Go”, present mode」

とか、何度教えても覚えません。

というのも「go」の過去形が「went」であるなどとはつゆ知らずのようだし、なんでそんな全く違う形になるのか想像だしていないようでもあるし、のその以前に、そもそも時制の存在そのものが従業員の日常生活の中にはないかのようで、どうやら周りの状況からして本能的に時制を自動切換えしているようなのです。時制変化のない同一単語(モード)で。

それで、仕方なく仕事を動かすために、今度はこちらが前後の状況や時間の前後関係から case by case で、同じ表現の「Go」を時には字義通り「go」と捉え、時には「will go」時には「went」に読み替えることにしたのです。

話の角度は少し変わりますが、なぜこんな話をしているかというところ「ワンコイン英語教室」で

「語学というのはコミュニケーション手段の一つでしかない。しやから他にもジェスチャーや表やイラストや表情なんかを使こうてもできるん」

とか

「英語なんて多少間違ってもいい。相手に伝われば」

とか言ったのですが、どうやら「間違ってもいい」という語句に引っかかりを覚えたらしく、なかなか喉元を過ぎないようで、次の回からは来なくなってしまいました。

で「間違ってもいい」という真の意味を、彼らにとっても肯定的にとらえてもらえる考え方（或いは教え方）はないものだろうかと考えていたところ、上記の話からヒントを得てかのドイツ哲学の巨星、ヘーゲルによる「止揚（アウフヘーベン）」理論をもじりがちにあてがって

定位：「使い方の正しい英語」

反定位：「敢えて間違えて使う英語」

両定位包含可能＝止揚「受験や外交を除き、目的がコミュニケーションならどちらの使い方も可。且つ having communication cards 拡大にも」

となった次第。

え、何？そりゃまた詭弁だって？（いささか、汗。Little bit sweat!!）